

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察予報について（送付）

このことについて、令和8年度（2026年度）病害虫発生予察予報第3号を発表しましたので送付します。

予 報

令和8年度（2026年度）病害虫発生予察予報第3号（6月予報）

I 主要な病害虫の発生予想概要

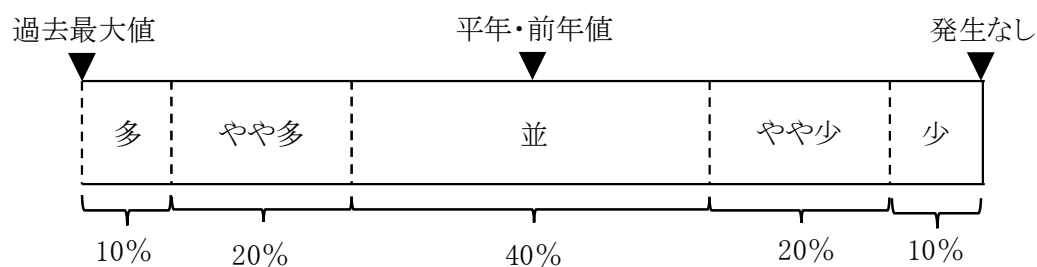
作物	病害虫名	5月の発生状況		6月の発生予想		
		早期・ 早植え	並	早期・ 早植え	並	前年比
水稻	いもち病 (葉いもち)	早期・ 早植え	並	早期・ 早植え	並	並
	イネミズゾウムシ	早期・ 早植え	やや少	早期・ 早植え	並	並
いぐさ	イグサシンムシガ		やや多		やや多	やや多
茶	炭疽病		やや少		やや少	並
	カンザワハダニ		並		並	並
	ハマキムシ類		並		並	並
	チャノミドリ ヒメヨコバイ		少		やや少	並
	クワシロ カイガラムシ		やや少		やや少	並
かんきつ	黒点病		並		やや多	やや多
	そうか病		やや多		やや多	やや多
	かいよう病		やや多		やや多	やや多
	ミカンハダニ		やや少		やや少	並
	チャノキイロ アザミウマ		並		並	並

作物	病害虫名	5月の発生状況		6月の発生予想	
		平年比		平年比	前年比
なし	黒星病	やや少		並	並
果樹全般	果樹カメムシ類	多		多	多
うり科野菜	退緑黄化病 すいか退緑えそ病	多		多	多
いちご	炭疽病	育苗ほ	並	育苗ほ	並
	うどんこ病	育苗ほ	並	育苗ほ	並
	ハダニ類	育苗ほ	多	育苗ほ	多
果菜類全般	コナジラミ類	並		並	やや少
	アザミウマ類 (いちご除く)	やや少		やや少	並
野菜類	オオタバコガ	並		並	並

II その他の病害虫の発生予想概要

部門	6月の発生予想	(作物) 病害虫名
	平年比	
茶	やや多	(茶) チャノキイロアザミウマ
	並	(茶) チャノホソガ、ツマグロアオカスミカメ
果樹	並	(カキ) 炭疽病
野菜類	並	(夏秋きゅうり) ベと病、うどんこ病 (野菜類全般) ハスモンヨトウ、アブラムシ類、コナガ

※ 発生程度は平年（過去10年間の平均値）・前年と比較し多～少の5段階で示している。



Ⅲ 6月の主要な病害虫の防除対策と留意点

水稻

1) 共通事項

- ・育苗中は異常な高温・多湿を避け、衛生的な環境で健全な苗づくりに努める。
- ・移植後の補植用苗は病害虫の発生源となるため、不要になり次第処分する。

2) 病害

- ・いもち病は、病害虫防除所のホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に葉いもち感染好適日の判定結果(BLASTAM)を掲載しているため、これを参考にほ場を観察し、発生初期に防除を行う。

3) 虫害

- ・中干し前で箱施肥を行っていない水田では、根の発育が不良な場合はイネミズゾウムシの幼虫による被害が大きくなるので、間断かん水を行い根の健全な生育を図る。周辺の雑草地から成虫が侵入するので、畦畔付近の生育をよく観察し、成虫が10株当たり5頭以上発生した場合は、水面施用剤により防除する。
- ・前年にスクミリンゴガイの被害が発生した水田では、水深1cm以下の浅水管理に努める。薬剤には貝が摂食して殺貝効果が現れる剤(メタアルデヒド等)と食害防止する剤(カルタップ等)があり、食害防止効果を持つ剤の使用後に、食毒による効果のある剤を使用すると効果が発揮できないので併用はしない。
- ・各種トラップへの海外飛来性害虫の誘殺状況を病害虫防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載し、随時更新するので、これを参考にほ場を見回り、早期発見、早期防除に努める。

麦

1) 病害

- ・赤かび病の発生が平年より多い(令和8年5月8日付け病害虫発生予察技術情報第2号(<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/309707.pdf>))。収穫が遅れると、赤かび病菌が産生するかび毒(DON)の含有濃度が高くなる傾向があるため、適期に収穫する。
- ・収穫した麦は可能な限り適切な水分まで速やかに乾燥させる。
- ・共同乾燥施設においては、荷受け時に赤かび病被害粒のチェックを行い、被害粒が見られた場合は必要に応じてその他の麦とは別に乾燥するなどの仕分けを行う。
- ・赤かび病被害粒は粒厚が薄く、比重が軽い傾向があるため、粒厚選別や比重選別により被害粒除去に努める。

いぐさ

1) 虫害

- ・イグサシムシガの第1世代の発蛾最盛日(5月19日)から予測される第2世代の発蛾最盛日は、6月24日である。病害虫防除所のホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に発蛾最盛日予測を掲載し、毎週更新しているので、最新の予測日を確認し、適期(発蛾最盛日及びその1~2週間の範囲)を逃さないように2回程程度の防除を広域で行う。
- ・産卵及びふ化幼虫の食入を防止するため、幼虫期に5cm以上の深水管理を行う。

茶

1) 共通事項

- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、主な対象に合わせた薬剤の選定及び系統の異なる薬剤のローテーション使用に努める。

2) 虫害

- ・チャノキイロアザミウマ及びクワシロカイガラムシの有効積算温度シミュレーションによる各地の防除適期や、ハマキムシ類のフェロモントラップによる誘殺消長を病虫害防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載するので、これを参考に適期防除に努める。
- ・ハマキムシ類の防除適期は、発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期である。
- ・害虫の発生が二番茶摘採と重なるときは、摘採後速やかに防除を行う。
- ・カンザワハダニは一番茶摘採後から発生が多くなる。多発してからの防除では十分な効果が得られないので、園地をよく観察し、低密度時から薬剤防除を行う。

果樹

1) 共通事項

- ・各種トラップにおける果樹カメムシ類の誘殺状況及びチャノキイロアザミウマ、ナシヒメシンクイ、ナシマルカイガラムシの積算温度による発生予測を病虫害防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載し、随時更新するので、これを参考に園地を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- ・開花期の薬剤散布では、ミツバチ等の受粉昆虫に影響が少ない薬剤を選択する。

2) 病害

- ・かんきつでは、黒点病の保菌率が高い5～10mmの枯枝はせん徐する。せん徐後もそれらの枝は伝染源になるので、園外に処分する。また、果実被害を防ぐため、主な感染時期である梅雨期直前から防除を始め、前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期、または25日～30日経過した時期を目安に防除する。
- ・なしでは、黒星病の発病葉と発病果実が周囲への伝染源となるため、見つけ次第園外に持ち出して処分する。防除は保護殺菌剤による予防散布を心掛ける。開花期までの防除が不十分な園では、降雨のたびに感染が拡大するため、晴れ間を見て防除を行う。薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。薬剤の年間使用回数はQoI系(FRACコード:11)、DMI系(FRACコード:3)及びSDHI系(FRACコード:7)がそれぞれの系統で2回、DHODHI剤(FRACコード:52)は1回を基本と使用する。

3) 虫害

- ・定期的に園を観察し、ハダニ類が多発する前に殺ダニ剤による防除を行う。マシン油乳剤を散布していないかんきつ園では、新梢葉でのミカンハダニの発生に注意し、雌成虫の寄生葉率が30～40%または寄生頭数が10葉当たり5～10頭に達したら薬剤防除を行う。ナシのハダニ類では、雌成虫の寄生葉率が20%以上または1葉当たり1～2頭に達したら薬剤防除を行う。
- ・果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。チャバネアオカメムシの越冬量については、令和8年2月10日付け病虫害発生予察技術情報第10号(<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/301622.pdf>)を参照する。

野菜

1) 共通事項

- ・チョウ目害虫の発生状況については、病虫害防除所ホームページの「調査データ」(<http://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載するフェロモントラップへの誘殺状況を参考にする。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2) 病害

- ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める。
- ・ウイルスに対しては、発病株が二次伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、直ちに処分する。トマト・メロンでは、ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスに感染する。また、他のウイルス病には罹病するので、媒介する微小害虫の防除を継続して行う。

3) 虫害

- ・ほ場周辺および内部の雑草は、微小害虫の生息・増殖場所となるので定期的に除草する。
- ・微小害虫は気温の上昇とともに活動が活発になるため、「増やさない」対策を徹底する。本対策は微小害虫が媒介するウイルス病に対しても有効である。冬春果菜類の栽培地域におけるタバココナジラミ防除については、令和7年11月6日付け病虫害発生予察技術情報第9号(<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/294706.pdf>)を参照する。
- ・トマトでは、ほ場をよく見回り、トマトキバガによる被害の早期発見に努める。被害葉や被害果実は速やかに除去し、ほ場外に持ち出して適切に処分する。本虫の密度を抑制し拡散を防ぐため、栽培終了2週間前まで本虫に登録のある薬剤防除を行う。対策の詳細や薬剤の選定については、令和8年4月1日付け農業革新支援センター情報「トマトキバガに対する防除対策について」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/74/240009.html>)を参考にする。
- ・イチゴでは、殺ダニ剤を散布する際は、令和7年5月1日付け発生予察技術情報第1号(<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/279436.pdf>)を参考にして選定する。また、ハダニ類の本ほからの持ち込みを防ぐため、育苗ほの管理作業は最初に行う。
- ・栽培終了後の「出さない対策」を徹底する。微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫を完全に死滅させる。施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。

F A X 版はここまで

発生予想の根拠等を含む詳細については、ホームページ掲載の電子版をご利用ください。
<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

IV 主要な病害虫の予想発生量（平年比）と根拠

- ※ 根拠各項に記した先頭の「○」は重視した根拠、「◎」は特に重視した根拠であることを示す。
- ※ 根拠末尾の（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は影響が少ない要因であることを示す。

九州北部地方の向こう1か月（5月30日～6月29日）の気象予報 福岡管区气象台発表

要素	低い・少ない	平年並	高い・多い
気温	10%	20%	70%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	30%	40%

水稻

1) 葉いもち

(1) 予想発生量 早期・早植え：平年並

(2) 根拠

- 5月の定点調査（16か所）では、発病が認められず（平年0.6%）、平年比やや少の発生であった（-）。
- ◎ 防除員報告（5地域）によると、5月の発生は平年並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の降水量は平年並の予想である（±）。

2) イネミズゾウムシ

(1) 予想発生量 早期・早植え：平年並

(2) 根拠

- ◎ 5月の定点調査（16か所）では、食害度3.3（平年9.1）、寄生頭数0.5頭/25株（平年1.3頭/25株）と平年比やや少の発生であった（-）。
- 防除員報告（5地域）によると、5月の発生は平年並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（+）。

いぐさ

1) イグサシンムシガ

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 八代地域の5月第1～5半旬の予察灯誘殺数は12.0頭（平年6.5頭）と平年比やや多であった（+）。
- 防除員報告（2地域）によると、5月の発生は平年並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（+）。

イグサシンムシガの誘殺状況

地点名	本年(頭)	平年値(頭)	平年比(%)
八代市1	3.0	2.3	130.4
八代市2	21.0	10.6	198.1
平均	12.0	6.5	184.6

※5月第1半旬～5半旬の合計

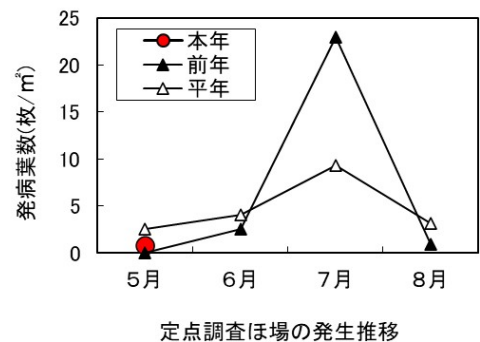
茶

1) 炭疽病

(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 5月の定点調査（8か所）では、発病葉0.8葉/m²（平年2.5葉/m²）と平年比やや少の発生であった（-）。
- 防除員報告（5地域）によると、5月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並の予想である（±）。



2) カンザワハダニ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ 5月の定点調査（8か所）では、寄生葉率6.9%（平年7.9%）と平年並の発生であった（±）。
- 防除員報告（5地域）によると、5月の発生は平年比多～並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高く（+）、降水量は平年並（±）の予想である。

3) ハマキムシ類

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

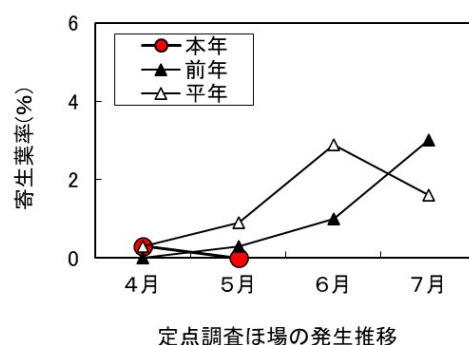
- 5月の定点調査（8か所）では、被害葉数0.1葉/m²（被害葉数平年0.6葉/m²）と平年比少の発生であった（－）。
- ◎ フェロモントラップ調査では、5月第1～5半旬のチャノコカクモンハマキの捕獲頭数が、合志市は18頭（平年38頭）、御船町は29頭、（平年31頭）と平年比やや少の発生であった（－）。
- ◎ 「防除員報告（5地域）によると、ハマキムシ類5月の発生は平年並であった（±）。

4) チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 5月の定点調査（8か所）では、寄生が認められず（寄生葉率平年0.9%）平年比やや少の発生であった（－）。たたき落とし調査の捕獲頭数も、平均1.1頭（平年15.6頭）と平年比少の発生であった。
- 防除員報告（5地域）によると、5月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（+）。

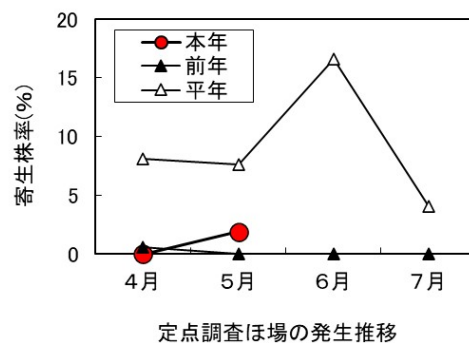


5) クワシロカイガラムシ

(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 5月の定点調査（8か所）では、寄生株率1.9%（平年7.6%）と平年比やや少の発生であった（－）。
- 防除員報告（5地域）によると、5月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（+）。



かんきつ

1) 黒点病

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

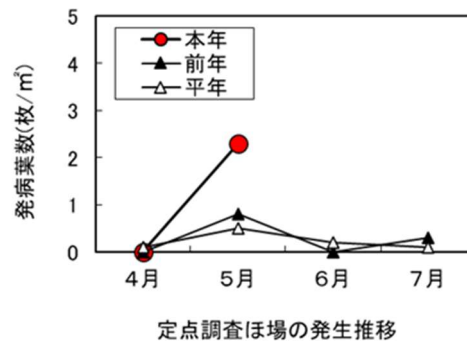
- 果樹研究所（宇城市）の無防除区では、初発は5月12日（平年5月29日）と平年より早く、発病果率が53.3%（平年5.1%）と平年より高かった（+）。
- ◎ 向こう1か月の降水量は平年並の予想である（±）。

2) そうか病

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 5月の定点調査(22か所)では、発病葉率2.3%(平年0.5%)と平年比やや多の発生であった(+)。
- ◎ 果樹研究所(宇城市)の無防除区では、5月下旬の発病葉率87.5%(平年56.6%)と平年比多の発生であった(+)。
- 向こう1か月の降水量は平年並の予想である(±)。

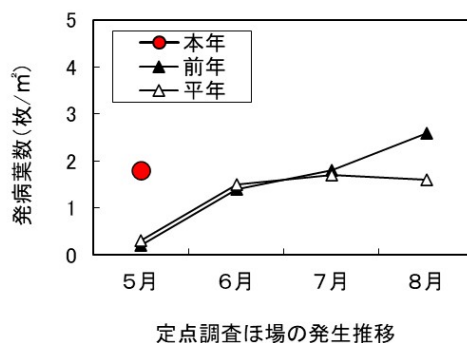


3) かいよう病

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 5月の定点調査(22か所)では、発病葉率1.8%(平年0.3%)と平年比やや多の発生であった(+)。
- ◎ 果樹研究所(宇城市)の予察ほ場では、5月下旬の発病葉率13.4%(平年8.2%)と平年比やや多の発生であった(+)。
- 向こう1か月の降水量は平年並の予想である(±)。

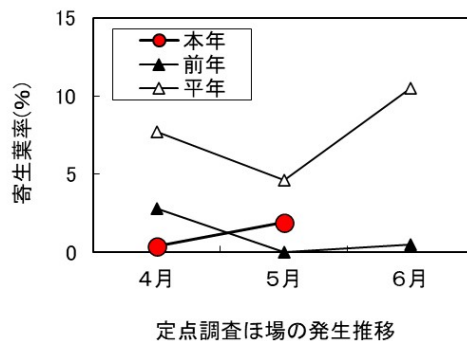


4) ミカンハダニ

(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 5月の定点調査(22か所)では、雌成虫の寄生葉率1.9%(平年4.6%)、寄生頭数0.6頭/10葉(平年2.6頭/10葉)と平年比やや少の発生であった(-)。
- 防除員報告(7地域)によると、5月の発生は平年比やや多~並であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年並(±)の予想である。



5) チャノキイロアザミウマ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ 防除員報告(7地域)によると、5月の発生は平年並であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高い予想である(+)

なし

1) 黒星病

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ 5月の定点調査（6か所）では、発病葉率0.3%（平年発病葉率0.7%）と平年比やや少であった（-）。
- ◎ 防除員報告（7地域）によると、5月の発生は平年比やや多～少であった（+）。
- 向こう1か月の降水量は平年並の予想である（±）。

果樹全般

1) 果樹カメムシ類

(1) 予想発生量 平年比多

(2) 根拠

- ◎ 4月～5月第5半旬までの予察灯によるチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺数は、各地点とも平年比多であった（+）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（+）。

果樹カメムシ類の誘殺状況

市町村名	チャバネアオカメムシ			ツヤアオカメムシ		
	本年(頭)	平年(頭)	平年比(%)	本年(頭)	平年(頭)	平年比(%)
合志市	208	116	179	620	152	408
宇城市	7730	954	810	8777	2567	342
天草市	11272	2243	481	8745	1697	515

※4月第1半旬～5月第5半旬の合計

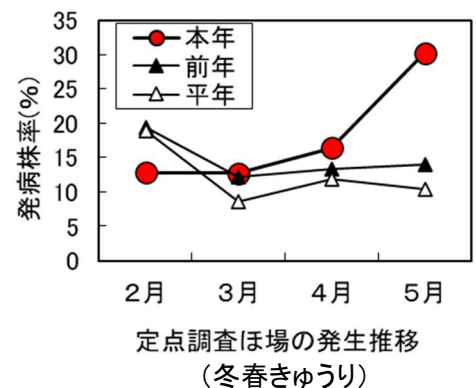
うり科野菜

1) 退緑黄化病

(1) 予想発生量 平年比多

(2) 根拠

- ◎ 5月の冬春きゅうりの定点調査（5か所）では、発病株率30.2%（平年10.4%）と平年比多の発生であった（+）。
- 防除員報告（5地域）によると、5月の発生は平年並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想であり、媒介虫であるコナジラミ類の発生に好適な条件となる（+）。



いちご

1) 炭疽病

(1) 予想発生量 育苗ほ：平年並

(2) 根拠

- ◎ 5月の定点調査（6か所）では、発病株は確認されず（平年0.1%）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（3地域）によると、5月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並の予想である（±）。

2) うどんこ病

(1) 予想発生量 育苗ほ：平年並

(2) 根拠

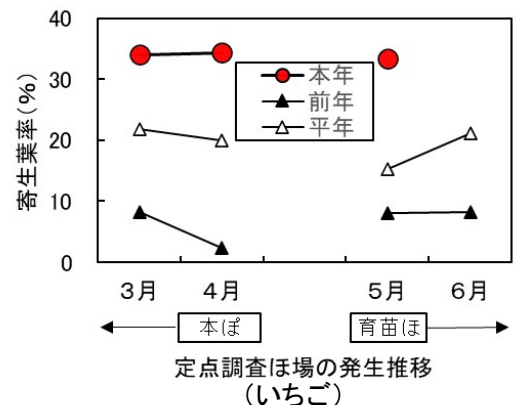
- ◎ 5月の定点調査（6か所）では、発病株は確認されず（平年0.1%）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（3地域）によると、5月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並の予想である（±）。

3) ハダニ類

(1) 予想発生量 育苗ほ：平年比多

(2) 根拠

- ◎ 5月の定点調査（6か所）では、寄生葉率33.3%（平年15.3%）と平年比多の発生であった（+）。
- 防除員報告（3地域）によると、5月の発生は平年並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（+）。



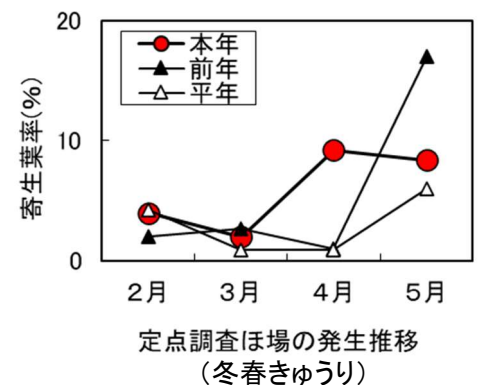
果菜類全般

1) コナジラミ類

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 5月の冬春きゅうりの定点調査（5か所）では寄生葉率8.4%（平年6.0%）と平年比やや多、いちごの定点調査（6か所）では寄生葉率0.3%（平年0.1%）と平年並の発生であった（+）。
- 防除員報告（13地域）によると、5月の発生は平年並～やや多であった（+）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（+）。

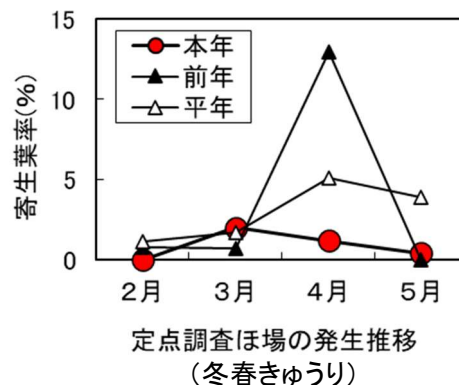


2) アザミウマ類 (いちご除く)

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- 5月の冬春きゅうりの定点調査(5か所)では寄生葉率0.4%(平年3.9%)と平年比少の発生であった(ー)。
- ◎ 防除員報告(10地域)によると、5月の発生は平年並~やや多であった(+)。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想である(+)。



野菜類

1) オオタバコガ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ フェロモントラップによる4月第5半旬~5月中旬(6月発生の前世代成虫)の誘殺数は、八代市で平年並、阿蘇市で平年並、山都町で平年並、合志市でやや少であった(±)。
- ◎ 防除員報告(4地域)によると、5月の発生は平年並であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高い予想である(+)

V 農薬安全使用

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう飛散防止を徹底し、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

VI その他

本情報は病害虫防除所のホームページにも掲載しています。

病害虫発生予察情報に関する詳細な内容等については、病害虫防除所(農業研究センター生産環境研究所内、電話096-248-6490)にお問合せください。

ホームページを
チェックだモン!



©2010 熊本県くまモン